

平成29年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
中学校の部 最優秀賞



異文化体験をする

福島県立会津学鳳中学校
3年 ファン・ヒョン・ナム

2011年に起こった東日本大震災は、近年稀にみる大災害であった。この震災で日本は、粘り強く、諦めない、強い国民性を発揮したと共に、国際社会からの信頼を再確認できたといえる。物資の援助は近隣諸国から留まらず、東南アジアやアメリカ、遠くヨーロッパからも、多大な支援を受けた。このことだけでも、日本の国際関係の良好性が伺えるだろう。

それだけではない。日本は、平和を愛する国としても世界にアピールしている。というのも、日本は世界で唯一の被爆国であるからだ。核廃絶のスローガン「ノー・モア・ヒロシマ」は有名である。原水爆実験禁止大会も日本で最初に行われた。日本は、平和主義国家としても、世界に広く認識されている。

一方で、国際社会とのつながりで何一つ問題はないのかというところでもない。今回は、そのうちの一つの問題である「日・中・韓不和」について考えていきたいと思う。これは、私がいくつかの表面上は異なる問題を、根本的な原因は一つのものであるとみて、総括してつけた名称である。慰安婦問題、尖閣諸島をめぐる領土問題、安倍首相が靖国神社を参拝したこと及びそれに対する非難、その他諸々。私のような若僧が何を、と思うかも知れないが、何とぞこの稚拙な考察に耳を傾けて頂きたい。

まずこれらの問題は、おおよそ全て歴史認識の違いによる相互不理解が原因である。

1910年、大日本帝国は朝鮮を併合し、植民地状態にした。1937年には日中戦争が始まり、民間人を含む多大な人的被害を発生させる一大消耗戦になった。

日・中・韓には、このような歴史がある。だから、互いを敵対視する風潮がある。別に全ての中国人が日本人を未だ根に持っているわけではない。しかし、政府などは、この戦争をいわゆるプロパガンダとして使うことがある。

例えば教科書である。国家が多少自分の歴史を正当化したり美化したりするのは、仕方のないことだ。しかし、東アジア諸国ではそれは少し度が過ぎるように思われる。はっきり悪と明言されることはないが、潜在的に相手国の非を攻撃する感じがある。そのくせ、自国の誤りには口を閉じている。

先日、歴史の授業で太平洋戦争について学習した。その中で、戦争中の国民の苦しみにについてこと細かく説明を受けた。それらについて否定するつもりはない。しかし、日本軍が南京を占領したとき、具体的にどのような暴行を行ったかや、占領される諸地域での人民の苦しみなどは教科書にはほとんど書かれてはいなかった。

これは不公平だと思う。歴史の授業は教育の一環として、過去の誤りを誠実に受け止め

るという姿勢だけでなく、他者の立場にたつて物事を考えるということも教えるべきだと思う。やはり、国際社会において必要なのは、「誠実さ」なのだ。

もちろん日本だけを責める気はない。この国の教科書はおそらく世界トップクラスの公平な教科書なのだろう。しかし、都合が悪いことを包み隠している時点で大同小異である。私達は自分らの歴史を語る時、常に、「〇〇人だったら」「〇〇人だったら」そして何より「地球市民であったら」どう伝えるのかを念頭に置かなければならない。

また、先程述べたような歴史を、不要にむし返すのも良くない。靖国神社の件がそれである。首相自身は戦死した兵士を慰めるためと公言していたが、中国の一部から非難があった。いちいち罪を咎める側も、そう臭わせる側も感心できない。それと対照的なのが、ヨーロッパだ。そこでは、ナチスの高官を祀ったり、またそれを咎めることなどは起こらない。彼らは、過去に囚われず、共に手を組んで歩んでいる。私達もそうあるべきだと思う。昔の過ちを忘れ、新たに仲間として突き進むというのが、私の理想とする未来だ。

そもそもこのような不和の根本的な原因の一つに、民族の単一性があることは否めないだろう。ここで私達は、一度国内での問題に立ち返る必要がある。

日本では古来単一民族国家であると認識されていた。国土の全てが島であり、外部から干渉（移民や侵略）はほぼなかったため、その認識が強く根づいてしまった。そのため、近代になってもその癖は直せず、併合した少数民族（アイヌ、ウイラタ、琉球）に対して弾圧などの誤った措置を施してしまっただけでなく、文明開化した後も、神国日本という保守的な精神を固持し続け、挙句の果てに朝鮮の人々に対する皇民化政策である。その「ジャパン・オンリー」の精神は消滅しているだろうか。いや、そうではない。改善はされたが、多くの日本人の価値観の根底に今なお残り続けている。

この点で、日本と大きく異なるのがアメリカ合衆国だ。この国でも、国への忠誠やら国家への奉公やらあるが、日本のそれとは大きく違う。というのも彼らにとっての国家とは、民族や伝統ではなく、むしろ国土や独立の証なのである。アメリカでは、アメリカで生まれた全ての人がアメリカ人なのだ。

よって、私達が見習うべきは、アメリカ式の愛国精神である。当然、「私はこう考えるから彼もきっとそうだ」という考えは捨てるべきだと思う。いつまでも同じ価値観の人と固まっていたはいけない。そうするといざ異文化の人と交流しても排他的な態度をとってしまうだろう。

つまり、日本は単一民族国家であるという認識を変えなくてはならない。

具体策なら、いくらでもある。まず、国内の異民族文化をより厚く保護する。教育現場でも実際に琉球文化に関する講義をする。より積極的に留学生を募集する、等。さらに、在日外国人に選挙権を与えるというのも良い政策だと思われる。日本で生活する外国人にとって、「代表なくして納税あり」ということほど、不公平なことはないだろう。せめて地方の代表は選ばせるべきである。

いずれにせよ、私は政治家ではないから、詳しいことは何ともいえない。しかし、政府はやはり何らかの形で単一民族国家の考えを変えることが必要であると思う。「異文化理解」ではなく「異文化体験」が大切なのだ。

これらの私の提言が、尖閣諸島等の諸問題の解決、歴史の認識の違いによる論争の和解決に直接つながるとはとても思えない。しかし、「我々は常に正しい」という価値観を改めることはとても大切なことであるし、今後更に重要になるだろう。

異文化を理解するだけでなく、それを肯定できるまでになれば、日本は真の意味で国際社会の仲間入りができたといえる。